

間もなく第二次近衛内閣総辞職に依つて閣外に擲り出されて終つた。松岡氏の渡米が如何程日米關係親善を回復したであろうかは疑があるが、彼としては、自分がアメリカへ渡れば必らず成果を得られるものと堅く信じていたものようである。それが松岡氏の強い自負心から出たことは疑ないとしても、その親米主義者たることを示す一事実たるを失わない。又後にも説明する通り松岡はスターマー及びオット両ドイツ代表に対し、「三国条約は戦争のための条約ではないから、万が一これがあるがため日本が戦争をせねばならぬようなことになれば、日本は此条約を廃棄するかも知れぬ、殊に日本はアメリカとの戦争を絶対に避けるであろう」と告げ、ヒトラーにその旨を報告して置いて呉れるよう依頼している。三国条約を締結しながらアメリカと親善關係を保てるものかどうかの理窟は別として、それも彼の親米主義の表われである。

かほどの反独親米主義者が何故三国条約を締結し、ドイツと結んでアメリカと拮抗するに至つたかは、次に説明すべき問題である。これを結論的に見れば、外相年来の主張たる東亜新秩序建設に熱心なる余りの行過ぎと、陸軍及び輿論の力に抗し切れなかつた弱さにあつたものと云うべきであらう。

第二節 何が松岡外相を三国条約締結へ持つて行つたか

前節所述の通りにひどいドイツ嫌いの松岡が、外相就任後僅か一二ヶ月で約交して、日独伊三国条約を締結する氣になつたのは何故か。これが松岡の外交理念とその背景をなす当時の客觀情勢との面から觀察されねばならぬことであるのは云う迄もないが、他面松岡の特異な性格を離れては説明しかねる問題でもある。

第一、松岡の特異な性格

松岡は所謂秀才型に属した頭の良い男だ。彼は子供の頃からアメリカに渡つたが、「急に外交官になりたくなつて」(これは松岡自身の言葉である)帰朝、外交官試験を受けた。当時は受験者も二百名程の内から数人を採用するに過ぎなかつたから、余程の秀才でなければパス出来ぬものとされていたに拘わらず、ほんの数ヶ月の自習で日本の法律の知識を得た松岡は、帝大あたりの優等生を尻目に、首席で及第している。この一事だけでも彼の秀才振りがわかる。

彼れの記憶力は絶倫で、何事にも意見が立つ。その内には誠にすばらしいものがある。彼れの恩人山本条太郎に云わせれば、三つに一つは誰も考え及ばぬようなことを考える、然しながら彼には幾つかの際立つた缺點が有つた。顕著な二三を指摘するならば、第一に、自信が余りに強かつた。「おれ」がやれば何でも出来る、「おれ」は外交の才能では誰にも負けない。こう云つた考え方が彼れの行動を無軌道にし勝であつた。彼は嘗てこう云つた。「僕は議論では誰にも負けたことが無い。又誰の前でも氣おくれなどしたことが無い。然しこれには唯二人の例外がある。一人は山県(有朋)元帥、もう一人は山本条太郎(三井王国の大番頭で、後には満鉄總裁で辣腕を奮つた)だ」と。山県、松岡の關係を私は知らぬ。山本、松岡の關係は、知り過ぎる程良く知つてゐるが、松岡の云う通りだつた。

彼れの自信は自惚れとなり、独天下となつたから、物事が兎角行き過ぎ勝ちだつた。進み出したら最後急坂を下る車のように、衝き当つて顛覆するまでは暴進し続け、途中で立ち止まつて考へて見ることの出来ぬ氣質だつた。彼れは外相就任後間もなく、オット大使を外務省に招致して日独合作に關するクエッションを出した（後節に詳説）それは別に三国条約締結の準備と云う程のものでなく、ドイツの氣を引き、反目的だつた米英を牽制する謀略であつたのだが、それからこのクエッションが妙に彼の頭にこびり付き、私選と色々議論をしているうちに、彼れの議論は遂に飛躍的な發展過程を取つた。即ち当時既に起つていた英独戦争の仲裁役を買つて出て世界を平和の昔に還そうとの野心的な考案へと發展した。私は支那事件をすら片付け得ないで、泥田に踏み込んでゐる日本に、そんなことが出来るものと云うと、彼は、「おれはやつて見せる」と真剣に云ひ張つた。自信の並外れに強い彼は、これを空想とは夢にも考へず、又そう考へるべきでないとし彼此と実現の手段を論じ出した。彼の考によると、日本が獨力で踏み出すよりもヨーロッパの強国と協力する方が遙かに良い。それはソ連を置いて外には無い。然し当時日ソの關係は、ソ連の蔣介石援助その他の問題山積のため甚だ悪化し、殊に張彭峯事件とノモンハン事件この方、兩國の關係は猶更ら緊張してゐたから、日ソ直接交渉の望みはない。そこで彼はソ連と親善關係にあるドイツを利用し、日ソ關係調整の役割を持たせるより外はないとした。事実当時の独ソ兩國は表面非常に親善であつたように見え、独ソ不可侵條約を締結する一方、その附屬密約で、バルト海沿岸諸国に於けるソ連の指導權を認めると同時に、ポーランドに南北に走る一線を劃し、兩國各々その一半を勢力範圍とすることを約し、兩國当面の利害衝突を解消してゐた。それがヒトラーの英仏侵略に対する後方の脅威を除去するための一時的の術策であることは疑がないとしても、独ソ兩國の親善關係は既に立派に成立つてゐたのだ。そこでドイツをして日ソ關係改善に乗り出させる望みが無い訳ではなかつた。他方ソ連は親独方針を極める前から続けてゐたイギリスやアメリカとの取引を全然打切つた訳ではなかつたから、ソ連と手を握つて英独戦争の仲裁を試みようとした松岡に一応の理窟は有つたのだ。理想的ではあつても、決

して目茶な思い付きではなかつたのだ。然し私は色々な理由からこれに反対した（後節に此点に触れる部分がある）然し松岡はどうしてもやると云つて聞かなかつた。松岡の頭は一步一步手近な問題から解決して行つて、大きい所へ向うことよりは、ぢかに大きいところから取りかゝる傾向が強かつたから、このドイツ利用は、その前に解決せねばならぬ幾つかの問題をほつてきぼりにした計画だつた。それが後日彼を日独伊三国条約締結へ引き入れ、陸軍の思ふ壺にはまらした一つの原因であつた。

第二に、松岡は非常に人氣を氣にし、輿論を察して善導することが大政治家大外交家の重要な資格だと、常に語つてゐた。又彼は自分に都合の良い輿論を作ることに苦心した。それがため彼がゼネバでやつた國際連盟退盟聲明は、多分に内地消費費用を含んでゐた。この事に限らず彼は常に大向うを睨みながら行動したことは周知の事實である。

翻て日独伊三国条約締結に關する日本の輿論（？）は、松岡の外相就任後、日と共に積極的になり、デモやプラカードは毎日の様に外務省に舞い込み、國民の大多数が三国同盟ならでは夜も日も明けぬ程の支持を与へてゐるかの外觀を呈した。これは大部分陸軍の作つた輿論ではあつたが、松岡の胸にはそれが甚だ強く応えた。彼は最初の程こそ偽造輿論などと陸軍の攻撃をしてゐたが、何時とはなしに狂的な輿論を氣にし出した。他方、彼が三国同盟に対する態度のはつきりしないのを憤つた陸軍からは、一日も速かな態度の決定を迫られた。この二つの攻勢は、時が立つに従つて松岡を親独方針に引き摺つた。右翼団体のあれこれの親分達が松岡邸に出入し、歸るさに懷を重くしてゐたのは此頃のことである。これを松岡から云わせれば輿論の指導だつたが、陸軍やその輩下の右翼主義者から見れば、逆に彼等の松岡指導であつた。そして結果から見れば後者が真実であつたことを否む訳には行かない。

第三に、彼は自分の雄弁に酔ひ且つ溺れる悪い癖があつた。彼は何事に付いても一かどの見識を持つてゐたが、所謂彼れの見識なるものは、沈思黙考、呻吟苦慮の賜であるもの少く、多くはひとと議論をしながら、段々と考へを發展して行つたものだつた。これは誰にでも多少は有ることだが、松岡にあつて特殊な点が一つある。それは議論が

留め度なく發展し、或限度を超すと、実行に遠ざかつて了うのだが、松岡は自ら此發展を得意がり、遂にはこれに酔うことであつた。然かも議論が相手方の考え方に依つて練磨されるのではなくして、自分丈で組み立てるのだから、前提が間違つていたら最後、何時までたつても是正はされずに、間違つたなりの發展をすることが往々ある。松岡は稀有の巧妙な話術を心得、相手には一口も利かせずに、自分だけがのべつまなしに論じ続け、而かも彼はこれを他人の真似の出来ぬ特長と考えていた。私などは幾度となく此長舌に遭遇し、早期から夜遅くまで立つにも立たれずに困り切つたものだが、此れは決して私に対する場合だけではない。オットやスターマーとの条約交渉進行中、グルー・アメリカ大使は、日本がドイツと結ぶのを自殺にひとしいと云つて、何回か松岡を説き伏せようと試みたが、何時も松岡に吹きまくられてすゞ／＼帰つた。この頃のグルー大使の國務省宛報告電報に「ナインティ・パーセント、松岡、テン・パーセント・マイセルフ」と有つたのは、有名な話である。かくして独りで論じて行く間に、独善的に彼れの頭が出来るのだから、その外交政策には、大事な仕上げがしてなく、一時の思い付きが編み入れられる場合が多い。三国条約なんかにもこうした習癖が相当物を言っているようである。

第四に、他人のやつた仕事でも、皆自分がやつたのだ、自分が教えてやらしたのだと云いたがる癖があつた。そしてそれに引き摺られて、自分の本当の考え方を不透明にし、時には何時とはなしにこれに引きずられる傾きがあつた。外相として渡欧し、ヒトラーやリッペンントロップからシンガポール攻撃を慫慂されると、彼は「それは私の疾くの昔に考えていることだ」と云つて、逆に攻撃の必要性を強調したなんかは、この悪い癖のさした仕業であつた。彼が帰朝すると、私は早速「シンガポール攻撃の約束をしたとの噂が有るが本当か」と訊すと「いや何も言質を与えていない」と答えた。なる程ベルリン占領後間もなくアメリカ國務省が発表したドイツ総統府から没収の外交文書を見ると、松岡はシンガポール攻撃の時期は日本自身によつて極められるであらうと云つた風なことを、ヒトラーなどに話している。これが明白に彼れの遁け道では有つたが、前後の文勢から見ると、ドイツ側の提案に対して、彼は立派

に同意を表しているとより外考えられない。これは後日彼が外相としての詰腹を切らされた一原因となつたのだが、三国条約締結に当つてもこれと類似した事情が有つた。元来三国条約の考え方は平沼内閣當時のヒトラーの勧告（事實はドイツが大島駐独武官、白鳥駐伊大使の發案をそのまま受入れたもののようである）に因を發したものであるが、陸軍側は、此要請に應ずべきだと、強硬に主張し、外務及び海軍の反共協定強化だけに止めようとする主張と対立し、両々相譲らず、六十幾回かの閣議を開いても解決せず、業を煮やしたドイツは、日本に何の挨拶もなしに、独ソ不可侵条約を締結し、平沼内閣を瓦解させた程の難物だつた。而して陸軍はこの主張を平沼内閣に次ぐ米内内閣にも、その次の第二次近衛内閣にも持ち越していたから、松岡が外務大臣となると間もなくこの陸軍の突貫に遭つた。

最初に三国条約を松岡に持込んだのは、予備の陸軍中佐で、天換打開期議會と云う、陸軍から指導と財政的援助を受けていた右翼団体を主宰した男であつたように記憶する。それから幾人かの右翼諸団体の親分達が、恐喝的に此問題を持込んだ。此等の連中は私のところへも屢々にやつて来て、凄文句を並べた。これ等は皆陸軍からの廻し者であるらしいが、少時の間は陸軍が表面に出て来なかつた。松岡は「今に陸軍が顔を出すよ」と云つていたが、果せる哉武藤軍務局長が此問題を掲げて松岡の私邸に現われた。それが何時頃かを判然と記憶していないが、松岡が三国条約には反対で、中国問題解決を先決問題としていた頃だつた。それにも拘わらず松岡は、例の癖から武藤の議論に聴かけた親独意見を陳述して彼を吃驚させたものだ。然し松岡の此意見には、無論ちやんと逃げ道が付けてあつた。海軍側が喜んで同意し、陛下が御許しになればと云う条件がそれであつたのだが、武藤としては、十べんか二十べんの膝詰強説が必要だと覚悟し、若し承諾せねば、内閣をつぶすばかりだと腹を極めてかゝつたのに、松岡が案外乗つて来た（言葉だけでは）ので、私を訪ねて、「君のところの大將は三国条約に同意した」と云つて喜んでいた。そこで私は武藤が還つた直ぐ後、松岡に、それは本当かと尋ねたところ「飛んでもない、軍人は簡単だね」と云つて、会談の内容を語つてくれた。武藤が占めたと考えたのは、自分の親独論にのしかかつて、之れを押しつぶすための松岡の駈引

だつたことを知らなかつたためだ。然し此の時の松岡の態度は、跡々まで崇つて、陸軍に喰ひ下がられ、議論を重ねている末、何時とはなしに自分の議論に酔つて了つて、知らず識らずに三国条約論者となつて了つたのだ。

斯うした缺点是、責任者たる地位にある彼にあつて誠に困つたことだ。鋭敏な松岡は、自分でも気付いていたのだが、そう思いながらどうにもならぬところに、天性の天性たる所以がある、彼れの行過ぎを訂正する有力者が彼れの側に居さえすれば、秀才型が誠に立派な仕事をさして呉れるのだとは、彼れの恩人山本条太郎の云つていたところであり、山本は又常に之れを実行していた。山本は松岡が外交官に成り立ての頃から彼を可愛がり、何くれと世話をし、松岡も亦山本を親か兄のように心得ていた。その山本が松岡を評して曰うのには「松岡は誠に立派な紳士であり、頭も並はずれて良く、三度に一度位すばらしいことを考え出すが、才がはちけ過ぎて行き過ぎるのがいけない」と。そして山本は松岡を調法がりがらも、その行動に適度なブレーキをかけていた。その一例をあけると、国際連盟脱退声明をして帰朝の船中に在つた松岡は、誠に意気銷沈し、鬱々として楽しまなかつた。それは脱退が彼の意志ではなかつたからである。此脱退声明は満州事件や支那問題に対する連盟参加諸國の日本非難に因を發したが、松岡はあの際の脱退が世界の多数國を向うに廻らす結果となり、日本の立場が益々不利益になることを、百も承知していた。彼が外務省から連盟總會に於ける日本の首席代表者となるよう交渉を受けた時（當時彼は浪人していた）彼は何とかして連盟の対日空気を好転させようと誓つた。ところが彼がジェネバに着くと、連盟事務局長の杉村陽太郎から、日本が強く出ればイギリスが靡くだろう、そうなれば他の参加國の間にもその例に倣うものが出て来るに相違ない耳打された。（これは松岡の話だ、一方口で真偽は判断されないから、杉村に聞いて見ようと思つてゐる内、かけ違つて会えず、その内彼は死んで了つた）ところが杉村の予想は全く外れ、松岡は脱退声明の已む得ない羽目に陥り、そのおそろしい結果を思うと、憂鬱にならざるを得なかつたのだ。ところが彼が横浜に着くと、予想に反して民衆の熱狂的な観迎を受け、着京忽々御陪食の榮を得、彼は全く有頂天になつた。山本は之れを見て「天子様と

友達つき合いをしているかに思い込む程の馬鹿な上り方では、手が付けられぬ。東京に置いては彼のためにならぬと、彼を招いて一年間山口県のある郷里に引つこめと諭した。松岡は不承無精に之れに従つたが、二月程たつとひよこり帰京し、山本に叱られたものだつた。若し山本が松岡の外相時代まで生きて居ればなら、松岡外交の方向は余程違つたものとなつただろうと、残念に思われてならぬ。

私が松岡から外務省外交顧問になれと勧められたのは、彼の外相就任後間もなくであつたが、私は氣乗りがしなかつた。永く外交界から離れていたこと、支那問題ならば相当研究もし、経験も持つていたが、欧米外交を知らない私に、職務のうまくやれる自信が少しもなかつたこと、その他の理由から一旦は断つたが、是非とも引受けると云われたので、当時宮内大臣だつた松平恒雄の意見を聞きに、一番町の官邸に行つた。松平は私の旧藩主の家柄の人で、子供の頃から私の指導者だつたから、可なり打明けた話の出来る間柄だつた。松平は「宮内大臣として政治向きの話をする訳には行かぬが、昔からの友達としての私見を述べる」と前提して「松岡は氣違ひでどんなことをするかわからぬ。白鳥が顧問で、大橋が次官という噂があるが（当時内定はしていた）同型の連中で成り立てられている外務省上層部は、世間から相当不安がられている。そこで誰かブレーキかけが必要になる。君が引受けるとならば、就任に大賛成だ」と、然し私にはそのブレーキ役も勤まり相にもなかつたが、他に適任者も思い当らなかつたので、とう／＼引受けることにした。然し多年親交のあつた松岡に内所でブレーキかけをする訳には行かぬから、松平の意見を彼に告げ、その決諾を得て就任した。

ブレーキ役を勤めた者にもう一人あつた。それは関屋貞三郎（後藤新平伯の懐刀で後の宮内次官）で、随分前から松岡と懇意にしていたが、三国關係条約交渉中にも屢々松岡のところへやつて来たり、私と打合せをしたりした。関屋は恐らく内大臣（最初は牧野伸顯、後に湯淺倉平）の内命に依つてブレーキ役をしていたのであろう。

ところが二人ともブレーキらしいことは何一つ出来なかつた。それは事件の進展が余にスピーディーで、後からばか

り逐いかけさせられたのと、松岡の人物が私どもよりは一段と上であつたことのためであつた。今更考えて見ると、誠に汗顔に堪えない。

第二、三国条約締結当時一般の情勢

三国条約などと云う大仕事（それが結局日本を世界戦争に引入れた恐い条約であつたとしても）は、松岡が外相に就任したと云うことだけで出来上る筈のものではなく、そこに至る迄の可なり長い背景がなければならぬ。それをかいつまんで述べる。

(一) 日本の海外発展の絶体必要と軍人の外交関与

此条約に対するドイツ側の価値付けの検討は後節に譲つて、日本側だけから考えれば、我国の人口の異常な増加が政治経済及び社会に強大な圧迫を加え、之れに制せられた日本が、海外発展を生存上の必須要件とせねばならなかつたところに、真の而かも根本的な動因が有つたのだ。

然しなから此の窮状脱却の手段に付ては、文武両派の根強い闘争が永い間続き（武断派は陸軍に依つて代表せられ、文治派の首領は外務省が取つた）此両者に連絡協調の保たれたときは、我外交の一元的に立派にやつてのけられた時期で、副島、陸奥、小村などの時代がそれである。然し此の時代以後は両者おのがじしばらばら外交をやつた。その代表的なものは、幣原外交時代から第二次世界大戦までであつた。このばらばらの原因を概観するならば、軍部、就中陸軍にえらい内部統制者がいて、引き締めた時代には、外交は先ずく外務省に依つて一元的になされ得たのだ。高島、山県、桂などの生きていた時代がそれであつた。無論これは伊藤、陸奥、小村等の文治派の傑物がいて、軍人などに甘く見られるようなことをしなかつたからであるが、大きな組織と暴力とを擁した軍部が、自儘な行動をされたら、文官などの頭脳だけで制止し切れない場合の多いことを云う迄もなく、軍と外務とはちぐはぐな行動

を取らねばならなかつた近年の日本は、誠に惨めなもので、歴代の外務大臣が真つ赤になつて主張した外交一元化方針の励行は、一に軍部の外交不関与のための統制の有無に係り、軍人が自儘な行動の留め手がなければ、外交の実権は、赤子の手をひねるが如くに、容易に外交官から奪ひ去られて終う運命にあつたのだ。然るに元帥上原勇作存生中まで保たれた軍部の統制が此人と共に終りを告げ、部下を押え付けられる程の大物が一人も居なくなつた。南だ、金谷だ、荒木だ、林だと云つても、（彼等は皆陸軍としては穩健派だつた）皆若手士官におどかされて、手も足も出なかつた実例は、二・二六事件や満州事件などの先例を引合に出すまでもない。そこで我国近年の外交、就中満州を含めた対中国外交の実権は、陸軍部に在つたと云つても、大きな誤謬では無い。三国条約を締結した第二次近衛内閣は亦此かる実情の下に成立したのだつた。聰明な近衛は軍部就中陸軍の専横を憂慮し、何とかして押えようと思つた。彼が松岡に目を付けたのは、識見に惚れたと云うよりは寧ろ彼が軍部に人気があることと、鼻づ柱の強い彼ならば、或程度は軍部を押え得るだろうと思つたことからである。そこで近衛は、一九四〇年七月大命が降下すると、飄然と輕井沢の別荘に赴いて、当時浪人の松岡を唯一人呼び寄せ、外相就任の内交渉をすると同時に、軍人の外交関与を抑えうる人物は、君を措いては無いとおだてたものだ。松岡はあやう男だから、「私が外相を引受ける以上、軍人などには外交に口出しはさせません。」と言いつて帰京した。それから三日程経つて開かれたのが例の四巨頭会議だ。陸相東條、海相吉田、（当時は何れも米内内閣の閣僚）浪人近衛、松岡の四人が近衛の別邸、荻窪の荻外荘に会合し、新内閣の根本方針を討議した。その際松岡は外交一元化の絶対必要性を力説し、東條、吉田の兩人をして無条件に承諾させたのだつた。これが空念仏であつたことは、先づ四巨頭会議の第二日目、東條が二十項から成る協議要項を提出し、その大部分が外交政策に関するものであつたことから立証され、その後も陸軍の外交干渉は依然として続けられた。そこで近衛は組閣忽々軍の干渉を押えるか、それに服従するか、若くは内閣をつぶすか、何れかを選ばねばならぬ羽目に陥つた。然るに第一は命がけの仕事だし、第二は面子や政治良心が許さないし、第三もそう容易に思い切れ

るものではない。これを三国条約に付て述べるならば、陸軍は平沼内閣時代の条約締結主張を、米内内閣から第二次近衛内閣へと持越し、絶えず文治派を圧迫し、若しも近衛内閣が思うように動かねばならぬならば、平沼、米内両内閣を仆したのと同じ手口で之れを潰そうと決心してかゝっている。然るに近衛は松岡ばかりを陸軍の攻撃目標とする程の、如何にも公卿らしい狡猾さは有つても、政治新体勢はじめ殆んど凡ての内政を陸軍側の思う通りにさせられた。殊に元老西園寺公望の病氣と引きつづく薨去とは、近衛を陸軍の案山子にして終つたから、松岡に対する陸軍の圧力は、それ迄の歴代の外務大臣に比較にならぬ程に強いものであつた。(後節参照)

(二) 海外発展の方向と手段とに關する文治、武断両派の確執

日本の海外発展の絶対必要性の認識は、文治派の頭領たる外務省と武断派の頭目陸軍とに聊かの相違がなかつたが、その方向と手段に付ては、対蹠的と云うべき程の著しい見解の不一致が有つた。先づ方向に付いて述べれば、陸軍の北進説と外務(海軍も大体同調した)の南進説とが鋭く対立し、手段に付いて云えば、陸軍の実力主義と外務の穩健主義とが噛み合つた、先づ海外発展の方向上の両者の相剋から述べる。少くとも日露戦争以来陸軍の仮装敵国はロシアであつた。陸軍は、此戦争で南滿に作つた足場を北滿から沿海州に抜けようと、目論んだ。然しながら滿蒙の経営なる当面の問題に制せられて、遠く北へ向う程の余力を持たなかつた。ところがその滿蒙の経営にしたところで、日露戦争で力を出し尽した日本に取つては、決して容易なものではなかつた。ロシアの脅威が依然として続いているし、此戦争から急に激しくなつた中国の排日が止みそうにも見えなかつた。終戦から一年程たつて陸軍中堅層(南、金谷などの名があげられていた)が、伊藤総理と小村外相に提出した滿蒙経営意見書には、このことを詳細記載している。

第一のロシアの脅威は、戦争後こそさして意とするに当らなかつたが、シベリア鐵道の完成、東支鐵道及西比利亞鐵道沿線守備兵の増加、大規模な東部シベリア開發計画などは、日本に取つては極めて気味の悪いものであつた。嘗

てカイゼルが「日本はウラヂオストックを一九一四—一五年以前に取ろうとしている。何となればバナマ運河がこの頃に完成し、アメリカの太平洋に於ける優越権が確定するからだ」と云つたことがある。これはノックスの滿州鐵道中立提議などを利用し、日本を中傷するためのものではあつたが、一面の真実を含んでいる。日本の沿海州への垂涎は、余程前からのことで、陸大などにはシベリア研究科を特設し、又シベリアで使用のための碎氷船や内火艇を沢山作つて隠して置き、浦汐やペトロバロスクと地勢の似通つた南樺太や北海道、千島の数地区で、盛んに敵前上陸の訓練をしていた。

之れと同時に陸軍は対露戦争のための他のあらゆる準備を進めていた。例えば、関東軍や滿鉄獨立守備隊の増強、多数密偵の北滿、西比利亞への派遣、對露攻撃軍事計画の數度の訂正、シベリアへの輸送幹線たりうところの四鄭、洮昂、奉吉、三鐵道の敷設、吉会鐵道敷設に対する中国側の承認の強要、内蒙古諸王の手なづけ等々、挙げ来ると對露戦争の準備たることの疑のない各種の措置を急ぐと同時に、陸軍と特別の間柄にあつた張作霖(馬賊から奉天省首腦者となつたのも、吉林、黒龍兩省の反張分子を排除して、張一統の滿州としたのも皆陸軍の公然又は隱密の援助に依つたもので、張の軍事及び政治資金の一部は、陸軍の要求に依つて内地銀行、財閥、滿鉄などから支給された)をして排ロシア態度を露骨にさせ、又帝制ロシアが戦後も猶保持した北滿の各種利権奪回を強行させたりして、折があればロシア極東から追払をうとし、「日本海を日本の箱庭にせよ」などと、威勢の良い主張が、陸軍方面から幾度となく振りまかれた。

然るに一九〇七年帝制ロシアが覆滅し、ボルシェヴィキーが政府を獲得すると、陸軍は好機至れりとし、ソ連勢力が極東に及ばない内に、東部シベリアを物にしようと、ウラヂオストック政権を作るやら、オムスク政府を押し立てるやら、セミョノフ一派やデニキン、ウランデル等を助けるやらに大奮になり、遂には関東軍を北滿に動かし、更らに内地からシベリアに出発しようとの内議をさえ続けていた。それから間もなく實現された連合国のシベリア共同出

兵は、チエコスロヴァキア軍の本国帰還援助を共同の主要目的としてはいたが、連合国側が日本の東部シベリア席捲を防止しようとの敵本主義が物を言つたと見られないでもない。然るに此共同出兵も永くは続かず、その間獲得した沿海、ザバイカル兩州に於ける日本の優越地位が煙と消え、ソ連のシベリア支配が確立されると、又しても陸軍の北進政策に対する脅威を大きくした。傀儡国満洲の誕生も、日滿議定書の締結も、新鉄道（吉会、吉哈、索倫諸鉄道）の建設も、満洲国の東支鉄道の買収も、北滿の要塞化も、関東軍司令部の新京（長春）進出、その他の数々の對滿施設も皆陸軍の北進方略の新しい準備以外の何物でもない。

陸軍の北進策に対する第二の脅威は、支那の排日である。日露戦争の勝利が支那官民の援助に負うこと少なからぬを知る陸軍は、支那を物資の背後地とすることの必要を痛感していたが、支那の排日は日露戦争以降盛にこそなれ、少しも衰えない。百の抗議も、千の苦情も何の効目もない。そこで陸軍は実力による排日抑止を考え出した。それにはおあつらい向きの小村北京条約の附屬文書（滿蒙治安に対する日本の重大関心を明記したもの）があつた。これは条約の一部と云う程のものではなく、日支兩國の間に話合が有つたことを「記録に留め」ただけのもののだが、陸軍は之れを以て、滿蒙治安維持のための、日本の強力行使の根拠となりうるものとした。そして滿蒙に支那本部の内乱が波及し又はその虞のあつた度毎に、関東軍司令官の名で、強硬な声明を出し、二度の奉直戦さいも、郭松齡反逆事件のときにも、之れを繰り返した。特に最後の場合には滿鉄沿線十キロ以内での戦争禁止の布達までもしている。

滿蒙の治安維持に日本が重大関心を持つのは当然で、何の不思議はなく、アメリカでさえ石井ランシング協定で「日本の領土に接壤せる地方に於ける日本の特殊權利を容認し」ている位だが、此の協定には二つの条件が付いている。「中國の獨立を毀損しない範圍内」ということが一つ、「米國の伝統的對華方針たる門戸開放機會均等の主義を認める」ことがもう一つである。小村北京条約附屬書の規定そのものには何等の違法はないが、この「重大関心」を日本が實力を以て守ろうとするとところに、違法性がある。外務省側もその尻馬に乗つたことは幾度有つたことであらう。

一体こんな声明は何の目的でなされたか。表面の理由は兎も角、内面では、自己菜籠中のものと日本陸軍の考えていた張作霖を援助し、その滿州王政的地位を確立して、排日を防止させると同時に、陸軍の北進方策実施の後方勤務をさせるためであつたことは、公知の事実であつた。そしてこれは張が滿州を統一して支那本部に乗込み、北支は勿論、上海南京その他長江流域に手を延ばし、排日をびたりと止めたことなんかを考え合わせる必要がある。

斯くして陸軍は滿蒙經營を自分の都合の良い方向に振り向けたのであつたが、これに対する文治派の態度は、正直なところ、甚だ徹底を欠き、悪く云えば無定見だつた。武断派が外交の実権を握つていた時代、例えば寺内内閣時代は、外務省は陸軍の出店の觀が有つて、彼の表世凱帝制問題、西原借款問題その他外務省の知らぬ間に、又はその反對を押切つて陸軍式外交を遂行し、更らに陸軍大將首班の田中内閣では、陸軍を背景にして政友会に地歩を作つた、外務政務次官森恪が陸軍と示合せて省内で意の儘に振舞い、東亜會議の決定と云い、山東出兵と云い、凡て陸軍々務局の思う通りの對支外交を強行した。軍人が作り上げた此兩内閣がかかる武断内閣だつたことには何の不思議もないが、立派な外交官出身の總理や外相の居つた内閣でも、これに類した例がない訳ではない。例えば寺内内閣の直ぐ前の大隈内閣では加藤高明と云う立派な外務大臣を持ちながら二十一個条要求を提出している。この要求案はその前年陸軍に依つて作成された支那問題處理案に少し外務省側の意見が組み入れられただけのものではあつた。第一次世界大戦のため、欧米諸國が中國内から手を抜いた好機に乗じたと云えば誠に利口相だが、事実それは陸軍側の大陸進出謀略の片棒をかつぎ、その北進策のため後顧の憂を絶つ狙いに御奉公したに過ぎなかつた。その結果はどうだつたか、最後通牒まで出しても我要求の一部が容れられたばかりで、それも商租權などと云う有名無実の權利が含まれてゐる。これに反し、中國の排日に依る損失はおびただしく、且つ中國に利害關係を持つ諸國殊に米英兩國の反日態度は高まる一方と云うひどい目に会い、米國の如きは「日本の目的は中國に於ける領土擴張を求めるものでないこと、殊に日本は膠州灣を中國に還付し中國領土を保全し、而して中國に於ける列強の商業的利權を保護し及び各國の機會

均等主義を目的の一とした日英同盟と一致した限度内で行動すべきである」との警告を發し、日本の大陸發展に対する國際的危機がアメリカと云う率直外交を代表者として明らかにされ、日本の立場は、以前に幾倍して困難なものとなった。然しながらかゝる内外の反日態度は、我軍閥をして却つて益々武力による大陸發展就中北進政策の遂行の決意を固めさせたものの如くで、大隈内閣に続く前述の寺内内閣の態度は事毎にこれを立証している。當時大分世間を騒がした西原借款の如きは、ほんの序の口で、當時の外務省記録には、その他幾つかの第二段階第三段階の措置案が載つてゐる。同内閣が本野子爵を外相に拔擢した事情に付いて、當時總理大臣秘書官だつた松岡洋右が私にこう語つたことがある。「本野と云う人はヨーロッパに許り居て支那のことなどは全く何も知つていないから極東外交は結局外交調査委員会の思う通りとなるであらう。」と、然るにその外交調査会なるものは、我國第一流の政治家と外交官との総意によつて、過謬のない外交方針を決定すると云う立て前になつてはいるが、事実上少くとも对中国問題（満州問題が主要事項だつた）の關する限り、陸軍の提案が、數の上に於ても、質的にも支配的で、決定的であつたことは、當時の記録を通覽すれば容易に知られ、此調査会に対する外務省の役割は、機密電報や機密信の写を委員に配ることと、案を整理することと、まづい決定の尻ぬぐいをするものが關の山であつた。それに軍側に幸した事件がその頃世界には次々に起つた。支那では袁世凱の帝制運動とその余波なる内乱が殆んど全国的に彌漫し、兵亂は屢々滿州に及ぼうとして例の治安維持宣言が繰り返された。張作霖の関内出兵、段祺瑞（之れも日本の陸軍と特別の關係を持つた人だつた）の國務總理就職等にも日本陸軍に糸をひくことの実証が有る。他方ヨーロッパでは対独戦争が拡大し、日本の対独宣戰、膠州灣占領等相次いで起り、日本の支那大陸に対する進出は、急速に進展し、陸軍は少くとも張作霖の勢力下にある滿蒙及中北支に對し、直接間接に内治外交に容喙しうる立場を作つた。殊に中国の第一次世界大戰參戰に伴う陸軍共同防敵軍事協定及び海軍共同防敵協定、兵器借款、參戰借款等は日本に滿州及び北支政權に対する指導權を法的にも認めたのだから、日本陸軍の北進の鼻息は益々荒くなつた。帝制ロシア滅亡後のシベリアの無政府

状態は、愈々これに之をかけた。これら諸方策が軍の指導により、外交調査委員会で決定されたことは云う迄もない。然しこんな制度から良い外交が出よう筈はなく、又責任感の強い外務大臣なら、こんな制度を甘受出来よう筈はない。そこで此の制度は次の原敬内閣の時に廃止されたのは当然であつた。斯くて外交調査委員会が廢止され、陸軍の外交事務所が無くなつても、その北進積極政策に聊かの後退の有らう筈なく、準備はその後も着々として進められた。

原内閣の成立から巴里會議ワシントン會議を経て、一九二七年春頃迄の日本の對華政策は概して列國協調の線に沿つた時代（主として幣原外交時代）だつたが、此の頃になると陸軍の統制は全く亂れ、滿州事件發生後は殊に甚だしく、外交統一も何も有つたものでなかつた。陸相寺内寿一が一旦は命がけで統制を図つたが、それも極めて不徹底で虎を野に放つた鯢があり、間もなく内亂状態までも引きおこし、下剋上が我政治を支配した。第二次近衛内閣は、かゝる時代に成立したから、近衛も松岡も、東条や吉田をだけ相手にしても一向埒が明かず、而かも此軍部閥僚は常に若手將校から威かされ続けたから、日本の内治外交は、中少佐階級の氣鋭猪突な若手層に依つて指導される実情にあつた。而して彼等は士官學校時代からずうつと北進論、對ソ戦争論で教育されて來た連中だから、陸軍の北進主張は、従前にも増して燥急苛烈なものとなつた。

これに關連して當時の外務省内部の不統一を述べねばならぬ。松岡が外相就任の少し前から、外務省には革新派と称せられる一派があつて、所謂幹部派なるものと對抗していた。この革新派は別名を白鳥派と云い、情報部長白鳥敏夫の下に、少數ながら大公使も課長も居つて、盛んに幹部を非難し、屢々陳情建白したり、集合したりし、その一部と軍の若手將校の一部とは密接の關係が有つた。これがため省内の統一は、軍の内部程ではないとしても、相当亂れていた。陸軍の手はそこまでも延びた。松岡は此派を程良くあしらつたから、外交に影響する程のことがなかつたが、省内不安の風潮は可なり顕著であつた。

話は少し横道に這入つたが、さて陸軍の北進方略は、第二次近衛内閣時代になつても少しも變るところなかつた。

支那事変は日本軍を中南部支那に進ませ、後には更に南方諸地域に迄も暴力範囲を延長したから、一見日本陸軍の方針が北から南へ方向を転換したもののようではあるが、事實は必ずしもそうではなかつたと信ぜられる色々な理由がある。それに関連して次に挙げる幾つかの私の経験を語る必要がある。

一九三七年八月九日大山中尉殺害事件が上海で勃発した翌日、私は他用を以て陸軍省に後宮軍事局長を訪問した。談偶々大山中尉事件に及ぶと、後宮は鋭い口吻で「海軍の大馬鹿者奴が、余計なおせっかいをやり出した」と罵り憤懣の色をかくしきれず「日本は楊子江あたりに手を延ばすだけの余裕はない。ソ連をやつ付けるのが先決問題だ」とブリ／＼していた。後宮と私とは可なり長い間のつき合いで、彼が満鉄附武官として毎日鉄道部に出動した頃私は重役で、満州問題や支那問題で、幾度となく意見を戦わしたものだつたが、彼はその頃からソ連打倒第一主義者であつた。軍務局長の要職に就いてからも、此の主義は依然堅持された。

私は又関東軍顧問だつた頃、参謀長の小磯や西尾、東条、板垣等とも親しくしていたが、その頃の此四人は揃ひも揃つて対ソ戦争論者で、若い参謀達は皆その旨を受けてシベリア攻略の軍計画を作つていたことは、市ヶ谷軍事裁判記録の随所に現われている。

又或時（第二次近衛内閣時代即ち私が外交顧問であつた時のこと）首相の近衛から私に会い度いと云つて寄越した。私は早速総理官邸日本間で近衛に会つと、劈頭彼は「北進か南進かを決すべき時機が来た東条君は北進を主張し、松岡君は南進を論じている。一体どちらが外国との摩擦を大きくするものか、君の腹藏のない意見を聞き度い」と切り出した。外交顧問としての私は、松岡の意見を支持すべきであつたかも知れないが、どちらが得策かの質問ではなくて、外国との摩擦云々の向であつて見れば、松岡の意見を顧慮することは無いと考へた。そこで私は「北進の方が摩擦が少ない」と答えて、その理由を併べ立てた。聞き上手の近衛は、なる程なる程と、尤もらしく聞いていた。「南の資源は平和手段で獲得出来ぬとも限らぬが、北進となると戦争になる」と云つた。その時の近衛では、陸

軍の武力北進論が如何にも心外に堪えぬと云う面持ちだつたことから察すると、陸軍はその時既に対ソ開戦の已むなき所以を近衛に説いていたのではなからうか、その後市ヶ谷軍事裁判の際提出された木戸日記や原田日記などを一通り目を通して見たが、私の此想像を裏付けるものが無かつたけれども、ソ連側の提出書類に之れに類したことが載つていたことを記憶する。

三国条約が出来てから後のことではあるが、私は満鉄の最高顧問となつて、主として涉外関係と調査とを受持つたことがある。ところが此調査部にはソ連問題を取扱う第二課が有つて、殆んど関東軍の命令事項ばかり取扱つていた。着任初々第二課長を呼んで仕事の大筋を報告したところ、満州事変以来ずっと東部シベリア資源の調査を言いつかつていた。その云うところによると、それは関東軍のソ連打倒の戦略的調査で、総裁副総裁も極秘の含みで仰せつかつてゐるのだと云う。そこで私は関東軍司令部へ行つて、調査部の指導上の必要を理由として、軍の対ソ方針を質問した。そうすると軍の機密は洩らせぬと云いながら、ソ連は出来るだけ早い機会に撃たねばならぬと考へてゐる旨を答えた。その頃は我軍が既に海南島を占領し、仏印への進駐のため待機中だつたのだ。

北進主義者の陸軍が何故南方に向つて進撃を続けたか、これは一面支那事変の發展、殊に援蔣ルートの開塞方針実施に伴う軍事的な自然發展であつたに相違ないが、他面南方資源がなくては、北進が不可能と考へられたためであつた。而して南方物資中陸軍の最も重要視していたのは、云う迄もなく石油である。殆んど全部を輸入に待たねばならなかつた日本としては、どうしても南方の石油資源を掌握せねばならなかつたことは云う迄もない。対日輸出国の大宗たるアメリカは、支那事変が始まるころから、石油禁輸を考へていた模様だつたが、それが日米通商条約違反であること、アメリカの如何なる急激な行動も、日本を軍国主義の下に団結させ、延いては蔣介石の予期しないほど頑強な抵抗が彼等の面目を失墜させ、再び自由分子を復活させようとするアメリカの希望を打ち毀すであろうと懸念されたこと、日本に石油の供給を断つことは、その南進を余儀なくするであろうと懸念されたこと等の理由から、アメリカ

は石油の対日輸出を引続き許し、唯僅かに日本向飛行機輸出に付いて所謂「道義的禁輸」を宣言したに止まつた。そこで日本はアメリカの陸海軍と張合つて、その国内市場で石油その他の戦略的物資を入札購入することが許されていた。アメリカは一方日本の侵略を強硬に抗議しながらも、猶ほ軍需物資の対日輸出を許していたのは結局は戦争の準備が整う迄の間のことであつたことは、一九四〇年のスターク提案その他で明白であつたに拘わらず、日本側殊に陸軍側はこれをアメリカに戦意なしと判断し、その後も猶ほ相当量の戦略物資がアメリカから入手可能と考えたが、三国条約締結後は、アメリカの態度は急に悪化し、小出し的ではあるが、次から次へと対日経済制裁を加えた。そうすると日本は忌でも南方資源に目を付けねばならなかつた。蘭印への進撃はかくて起つた。此の進撃の新聞を見た私は参謀総長の梅津と軍事参議官の西尾とを訪ねたところ、二人とも「油が無くては動きが取れぬから、已むを得ない」と云つていた。

要するに日本陸軍の北進論は日露戦争以後ずっと続いて変らなかつた根本方略で、南方への進出は、物資確保を主要な目的としたことは、以上の通りである。然るに之れに關する外務省の方針はどうであつたか。その沿革的説明は既に述べた通りであるから省略するが、此点に關する松岡外相の考え方は、飽くまで南進であつた。彼は満鉄理事として、次いで副総裁として、更らに総裁として、可なり長い間満州を見、滿蒙經濟開發を企圖していたから、感情から云つても滿蒙に強い執着を感じざるを得なかつた。それにも拘わらず彼は溫帯に育つた日本人の發展が寒帯や亞寒帯よりは、暖かい土地に於てより多くより効果的になし遂げられうるものと確信し、「火燧を背負つて移民が出来るものか」と云つていた。彼の言に従えば、その同郷の先輩たる伊藤、山県なども同意見で、滿蒙は政治的に重要であつても、経済的には、或種の地下資源を除けば問題にならぬつまらぬものと説いた。これが彼の蘭領ニューギニア買収計画、ダバオ殖産事業計画、南洋開發会社の日本政府所有株滿鉄肩代り等となつたものである。

然しながら松岡の南進策と陸軍の北進策とをつなぎ付けた一つの事柄が有つた。それは日支事變の膠着であつた。

陸軍が中国を對ソ戦争の我背後地とする方針は既述の通りだが、松岡の南進論にしても、中国と戦争をしているのは、到底うまく行かぬ。そこで両者は支那事變急速解決に意見が一致した。ところがこれは當時としては難事の中の難事であつた（後節に詳説する）から、双方とも焦つて、出来る限りの手を打つたが、軍の面目を全潰れにして全面撤兵でもしない限り、中国側も、それを支援する西ヨーロッパ側もうんと云わぬ。困り抜いた末、例の対米英の「毅然たる態度」主張となり、それが段々と三国条約締結へと、松岡を引張つた。陸軍の甚だ強い圧力がそれを促進させたことは云う迄もない。

松岡の南進策と陸軍の北進方略とは、發展すべき地域の方角を別にしたばかりでなく、手段をも異にした。松岡の意見は少しづつ變つては行つたが、軍の武断主義に對して、松岡は少くとも最初の間は協調主義商取引主義を取つた。彼は「無侵略」主義を持ち、軍の武力による海外進出を力強く非難した。然しながら彼の此協調主義には甚だしい矛盾が有つた。それは力の行使なしに南進策實現の可能性が甚だ少なかつたことである。何となれば彼れの所謂東亞共榮圏の主要な地域が、西ヨーロッパ諸国の領土、植民地又は勢力範圍に屬し、殊に第一次世戦以來列國が相争つて取つたナショナルリズムは穩和手段に依つての南進を不可能にしたからである。

此点に付いて松岡の意見は、段々と變つて行つた。始めの程彼は飽迄協調主義を取つていた。即ち外務大臣に就任してから三国条約締結其後に至るまで、彼は「無侵略、無併合、無強制」の新秩序の建設を企圖し、議會演説の随處に此主張が見られ、三国条約に關する枢密院御前會議にも持ち出され、後にはヨーロッパに持つて行つて、スターリン、ヒトラー、ムッソリーニあたりまで説き廻つた。これは決して彼れの外交辭令ではなく、經濟發展を基調とした海外發展は実力行使と相容れないものと考えていたからである。彼は万国をしてその処を得せしめねば、新秩序がないとし、三国条約の前文にもそのことを明白に規定した。此条文は松岡の命を受けて私が書いたものだが、その際も「無侵略無強制」主義を繰返し論じていた。然しながら此考え方は当然のことではあるが、直ぐに嚴確に打つつか

つて動けなくなつた。それは日本の大陸進出に対する西ヨーロッパ諸国の憂慮が、我が軍の勝利と共に強烈になり、米英仏の援蔣行動が、如何に交渉をして見ても阻止しえなかつたためであつた。天津英租界問題こそ或程度交渉の利目が有つたが（軍の強圧が英國の譲歩を余儀なくした原因であつた）又ビルマルートがたつた三ヶ月閉鎖され形式から見れば、外交交渉が利いたのだが（事實は英独戦争が起りかけていたせいである）何としてもすつきりせず、我國は益々窮地に逐い込まれる許りであつたから、松岡の考え方が變つて、「間接の強力行使」（これは松岡自身の言葉そのままである）即ち直接日本が兵力を動かすことなく、殖民地の独立運動を物資に依つて支援する方法ならば、已むを得ないと言ひ出した。然し軍はこれを手ぬるいとし、松岡の知らぬ間に、台湾と海南島とに大軍を集結し、待機の姿勢を取り、松岡が北部仏印進駐の交渉をフランス政府と進めているのを見守つたが、フランスは勿論うんと云わぬ。そのみならずA、B、C、包囲態勢が日ましに強化されて来た。松岡の意見が直接武力行使も或程度已むを得ずとするのに至つたのは、その頃からのことであつた。

（三）我海外通商の行詰りと国内の不安

第一次世界大戦の頃から急激に發展した我海外貿易は戦後年を逐つて凋落を示し、三国条約締結の頃になると全く行詰つて終つていた。これは大戦争の遺産とも云うべき恐慌の飛ばつ尻を喰つたことに依ることは云う迄もないが、持たざる国日本に取つては、それよりも更に根本的な理由が有つた。各工業国に起つた経済ナシヨナリズムがそれである。

第一次世界大戦は前後八年に亘つた前代未聞の大戦争であつたから、交戦国は皆軍需生産に大重となつたことは云う迄もないが、非交戦国と雖もその例に洩れず、世界に軍需大工業を林立させた。終戦は此種工業の整理を余儀なくしたが、尚ほ大部分が転換平和産業として存続した。然るに元來軍需工業は、大規模な、工率の高い、そして均一製品を作る工業であるから、その平時工業への転換にも自然に限度が有つて、平和工業となつてからも、大規模と高工率

と均一生産の特長を受継いだから、戦後群生した凡ての工業国は、殆んど同じような製品を、多量に且つ迅速に市場に供給した。その当然の結果として生産過剰が起つた。一九二九年から引き続いた世界大恐慌は、弱体な工業を整理の節にかけはしたものの、この頃からの恐慌は、多分に永続性を帯びて来た。従前のならば、恐慌は常に周期的経過を取り、或時期を経過すると、景気が好くなつたものだ。七年周期説などが行われたことのあるのはこれがためだ。それが五年周期説に變り、更らに期間が短くなる様子が有つたことは事實だが、周期恐慌の考え方は、決して覆えされはしなかつた。

然るに第一次世界大戦は此説を打破し、永続的な恐慌の様相を示したことは、戦後幾度かの大恐慌が非間歇的に起つた事実が之れを証明している。これが当然各工業国をして自産業自衛措置に逐いやつて、各国は皆自国領土や殖民地に於ける自国製品市場確保の措置を講ずるに至つた。これが経済ナシヨナリズムの起つた概略の事情である。然かもこのナシヨナリズムは高関税等の普通的手段を手ぬるしとし、輸出入の禁止及び同様な制限が到るところに実行されたから、我國のような領土が狭く、殖民地も殆んど持たず、而かも工業原料の大部分を外国から輸入しなければならぬ国柄に取つて、経済ナシヨナリズムは正に産業死活の問題で、国家存亡にも直接する大問題であつたのだ。一時世界の問題となつた日本品のダンピングや密貿易や、過度の産業保護制度やナシヨナリズムに対する已むを得ぬ対抗策であつた。

斯かる苦境切抜策は、当時としては誰が考えても二つきりない。領土拡張とブロック経済の樹立とである。そして松岡はこの第二の手段を採らうとした。これが東亞共榮圈思想の根底をなした。（詳細後説）